

宮沢賢治の童話

——その創作動機と成立過程について——

萬 田 務

序

宮沢賢治の童話の成立をめぐる多くの人がさまざまな考察を試みているが、今、代表的なものとして草野心平の『賢治覚書』をあげてみよう。

賢治の童話や詩は、彼自身の芸術創作の星雲的要望とその「奨め」（高知尾智耀の・萬田註）とによって初めて積極的に意図されたもののようである。事実、忽然といった言葉が全く当てはまるように「在京の一月より八月（大正十年・萬田註）に至る間、創作熱最も旺盛、或る月は三千枚も書く。全集第三巻第四巻の作品の多くはこの六箇月間に草稿或ひは構想されたるもの多し」と、年譜には記されている。

賢治が最初に童話を書きだした時期は、大正七年六月であるし、彼が高知尾智耀から「奨め」られたのが大正十年二月であるから、ここに二年四箇月というずれがあることがわかる。また、谷川徹三の環境説は「環境も亦童話の制作に適合していたであらう。信仰が

これを促したばかりではない。大都會の唯中で、親しい友もなく、筆耕や校正のやうな無味乾燥な仕事で貧しい生活を営むものにとつて、自由な空想の世界に人を遊ばせる童話の制作ほど心をうるほし慰めるものはないからである^{註1}」というように上京後のことを述べているし、串田孫一の童心説「賢治は成人の眼と子供の眼とを同時に持つてゐたとも言はれてゐます^{註2}」。「普通の大人が、どれほど巧みに童心の世界を自分の中にしつらえても、ただ巧みさからでは出来ないと思います。賢治には子供の世界が、肉体的にも残されていたことが大きな要素になってゐます^{註3}」など、いろいろあるが、谷川説は草野説と同じように上京後のことを述べ、時間的なずれがあり、串田説も実証的なものではない。これら二氏の説はいずれも確かに賢治における童話創作の一要因を示しているが「何故、賢治は童話を書いたか」ということに関しては、間接的要因であり、この可能性を現実化した積極的・直接的動機については何も語っていない。おそらくその直接的動機は何か他にあったに違いない。この点、草野心平の「高知尾智耀の奨め」ということは、あなたがち否定すべき

ことではないのであるが、ただ先述したように時間的なずれがあり、これをもってその動機とするわけにはいかない。賢治の童話創作段階は他の作家のように一筋的なものではなく、多面体をなしていると私には考えられる。その多面体を究めるために、まずその経路を見、その経路に従って考えを進めていきたいと思います。賢治の文学活動を時期的に見れば、次のように四期に分けられるであろう。この四つの段階を年代を追って述べたい。

(1) 大正七年—九年

盛岡高等農林学校研究生時代。短編スケッチ創作、浮世絵版画の蒐集、法華信仰の布教などする。作品——『蜘蛛となめくちと狸』『雙子の星』『貝の火』等。

(2) 大正十年一月—八月

父母の改宗を熱望して容れられず、国柱会奉仕のため突如上京す。筆耕校正にて自活し、街頭布教に従う。国柱会の高知尾智耀に奨められ、「法華文学の創作」を決意す。

(3) 大正十年九月—十四年

帰宅後、生地花巻の農学校に奉職。詩集『春と修羅』、童話集『注文の多い料理店』を自費出版す。

(4) 大正十四年—昭和八年

花巻農学校を依願退職し、「羅須地人協会」を設立。作品——『風の又三郎』『ポラーノの広場』『銀河鉄道の夜』『グスコープドリ』の伝記』等。

註1 岩波文庫『風の又三郎』解説。

2 『四次元』十号。

3 『四次元』三十一号。

(1)

賢治童話の処女作『蜘蛛となめくちと狸』を書きだしたのが大正七年六月である。この時期が児童文学史上、どのような時期であつたらうか。

児童文学を市民的な感覚と近代的な芸術性によって立てなおそうとする気運は、ようやく熟しつつあり、その気運に方向を与え、新しい児童文学運動をよりあげたのが、鈴木三重吉主宰の雑誌『赤い鳥』である。^{註1} 船木枳郎の『現代児童文学史』によれば、第一次世界大戦の始まった頃から、婦人や子供に対する関心が世界全般に高まり、日本においても戦中戦後を通じて婦人雑誌や児童雑誌が啓蒙的役割をもつものとして盛んに刊行され、それにつれて童話熱が急速に高まり、余技の域を脱しなかつたといえ、当時の一流文人はこぞってこれに筆を染めたという。しかもこうして創作童話が発展の途についた時、世界大戦による海外文化の交流に刺激され、外国童話もまた急激に広まり、イソップ、グリム、アンデルセンの翻訳など正に創作童話をもしのぐ人気であつたといわれる。創作童話の立ちおくれは、芸術性の高いものが乏しかったとこに理由があり、一流文人が童話雑誌に参加したことは坪田譲治の「作家という作家でその頃童話の一編も書かなかつたという人は恐らく数えるほどしかないと思われ」という言葉によつてもうなずくことができる。^{註2}

のようないろいろな事情が大正七年六月『赤い鳥』の創刊を促したのである。

ところで、この大正七年六月、『赤い鳥』の創刊と時期をおなじくして賢治は処女作『蜘蛛となめくちと狸』の創作を始めているのである。いまこの両者の年月の一致を重要視しなければならぬと思う。これを単に偶然の一致としてかたつけることができない。賢治がゴッホの絵に感動した^{註3}こと、そして「大正七年五月より」のところで『アンデルセン白鳥の歌』と題する十首の歌を詠んでいること、また、彼のイーハートヴオ宣言における「大小クラウス」というのは、明らかにアンデルセンの「小クラウスと大クラウス」のことである。

彼の童話の創作動機つまり彼の童話文学者の資質をめざめたのは、これらアンデルセン及び『赤い鳥』の創刊であつたとはいえないだろうか。詳しくいうならば、当時の童話流行の風潮に刺激され、少なからずこうしたものへの関心を持ち始めていた彼がたまたまアンデルセンを読み十首の短歌を詠む程感動した矢先、鈴木三重吉の『赤い鳥』が創刊され、一流文人がこぞってこれに執筆するに及び希望と情熱に燃えていた若き賢治も自らこれを試みだしたということは当然すぎる程当然ではないだろうか。アンデルセンと同様、彼が『赤い鳥』に関心をもっていたということは大正十年一月、上京した際に三重吉のもとへ訪れていることからもうなづける。こうして始まつた賢治の童話創作は大正十年に上京し、高知尾智耀の「奨め」を受けて本格的なものとなっていく。ただ「奨め」を受けても彼に童話文学者の資質がなかったならば、本格的なものになる

はずがなく、まして「或る月は三千枚も書」けるはずがない。

ここに恩田逸夫の言うように成人が童話を書く気持として、(1)児童愛・(2)児童尊重・(3)児童の心的特性にせられた興味・(4)童話の象徴性や抒情性に対する関心という四つの条件を賢治がことごとく備えていることや、彼の家庭環境、自然環境も彼の童話を考える場合には無視することができない。家庭環境としては賢治が幼少の頃、彼の祖母が子守唄の代りに童話風の話を聞かせて眠らせている。このことが知らず知らずの間に賢治の中に浸透していったと考えられるし、民譚の宝庫とも言うべき東北地方の民俗的環境も、童話成立上に大きな位置を占めていると思う。これは柳田国男蒐集の『遠野物語』によっても窺えることである。賢治の童話の作品中、民譚的要素を含んでいるものとしては『風の又三郎』、『さしき童子の話』、『狼森と笹森盗森』、『林の底』、『さるのこしかけ』、『水仙月の四日』等が挙げられよう。

このように賢治自身に童話文学者としてのすぐれた素質があつたからこそ、そうした外的刺激を敏感にとらえ得たのであることは、今更言うまでもないであろう。

註1 管忠道著『日本の児童文学』参照。

2 註1と同じ。

3 続橋達雄「ゴッホとの邂逅」(『四次元』九三号)

(2)

かくて賢治は大正十年一月上京する。その事情について賢治年譜

には次のように記されている。

大正十年 二十六歳（二五八一）一月、法華經敬信の念愈々篤く、父母一家の改宗を熱望せるも容れられず、遂に家を離れて上京せんと決意す。時たまたま、棚の上の日蓮上人遺文集が突然落下せるに、家を去るは今なりと、法華經、遺文集を携へ、旅費のみにて上京し、本郷菊坂町稲垣方の一間を借り、昼は筆耕、校正等を働き、夜は田中智学氏の国柱会に奉仕し、時には街頭布教をなし、日曜祭日には図書館にて勉強す。当時馬鈴薯と水にてその日を過すこと多かりき。

二月頃国柱会の高知尾智耀氏の奨めもあり、文芸に依り大乘教典の真意を掘めんことを決意す。（以下略）

この「奨め」がたしかに「一月より八月に至る間、創作熱最も旺盛、或る月は三千枚も書」かせたかも知れない。この年譜の表面だけを見ると、田舎の素朴で純情な青年が「一家の改宗を熱望せるも容れられ」なかつたために上京したかのように思えるが、ただその理由だけとはどうしても思えない。童話によって「大乘教典の真意を掘め」と共に、何んとかして世に出ようとする意識（中央文壇への憧憬）と花巻という生活圏を離れ、父のもとから去って独立（経済的に）しようとする意識とを持っていたので、それが賢治をして家出同様の上京を促したのであって、全部が全部「父母一家の改宗を熱望して容れられ」なかつたためではないと思う。中央文壇への憧憬ということとは上京早々『赤い鳥』の鈴木三重吉のもとに自分の童話作品を持って訪れていることからわかるし、また、彼が関徳弥に宛てた書簡に

私は書いたものを売ろうと折角しています。それは不真面目だとか真面目だとか云って下さるな。愉快な愉快な人生です。（中略）図書館へ行って見ると毎日百人位の人が『小説の作り方』或は『創作への道』というような本を借りようとしています。なるほど書くわけなら小説ぐらい難作ないものはありませんからな。うまく行けば島田清次郎氏のように七万円位忽ちもうかる、天才の名はあがる。どうです。（大10・7・13）

とあるが、これによっても文壇への野心は明らかであらう。

島田清次郎の『地上』第一部は大正八年六月に出版され、異常な人気を呼んだ。島田清次郎は当時二十一歳。つづいて第二部を九年二月、第三部を十年一月、第四部を十一年一月に出版されている。

当時二十六歳の賢治が、島田清次郎の成功に心動かされ、経済的自立（七万円位忽ちもうかる）と名声獲得（「天才の名はあがる」）への華々しい未来を夢みたことは覆いきれない。書かずにはいられない内的衝動ではなしに、スターへの憧憬から書きはじめているのである。更に、大正十二年一月にも令弟清六に童話原稿多数を『婦人画報』編集部に持参せしめていることによって、中央文壇への野心は決定的なものと言えないだろうか。この関徳弥宛の書簡において注意しなければならないことは次の文面である。

おお。妙法蓮華經のあるが如くに総てあらしめよ。私には私の望みや願ひがどんなものやらわからない。これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です。いくら字を並べても心にないものはてんで音の工合からちがふ。頭が痛くなる。同じ痛くなるにしても無用に痛くなる。

これによると賢治は宗教即芸術ということを主張している。「小説ぐらゐの雑作もない」といいながら小説を書かなかった理由が自然とわかってくる。「小説には、彼のイメー^註ジ、彼の思想が盛切れなかった、——もれなかったことを意味します」という佐藤勝治の意見に賛同することができない。彼が初期に『疑獄元兇』という小説を書いているし、彼自身の言葉にも「確かにこの通り心象の中に現はれたものである」と言っていることからしても、単に思想やイメー^註ジの過剰という考えのみではかたづけられないと思う。彼の短歌、散文のスケッチの殆んどが自然の風物に触発させて書いたものである。このような彼に島田清次郎の如き、いはば作り物の華やかな大衆的作家の作品が「頭が痛くなる」と映じたのだと思われる。そこで彼はただ小説を書くだけでなく「文芸に依り大乗教典の真意を掘め」ることを目的とし、この手段に童話を用いたのである。

高知尾師ノ奨メニヨリ

法華文学ノ創作

名ヲアラハサズ

報ヲウケズ

貢高ノ心ヲ離レ

筆ヲトルヤマツ道場観

奉請ヲ行ヒ所縁

仏意ニ契フヲ念ジ

然ル後ニ全力之ニ従フベシ

断ジテ教化ノ考タルベカラズ!

宮沢賢治の童話

タダ純真ニ法楽スベシ

タノム所オノレガ小才ニ非レ

タダ諸仏菩薩の冥加ニヨレ

賢治の言う「宗教」を法華経の真理を信じ実行すること、「芸術」はその信仰を芸術の論理に従って表現することと解するなら、芸術は教化的手段に転落する危険性があるし、また、「妙法蓮華経」のあるが如くに総てをあらしめよ」という信仰が優先するかぎり芸術は信仰表現の一方法、いわば教化的手段の役割を担わせられる。であるのここに「断ジテ教化ノ考タルベカラズノタダ純真ニ法楽スベシ」と述べており一見矛盾しているように見える。彼が関徳弥に宛てて宗教即芸術と書いたときにこうした問題を省察するいとまがあったのだろうか。

また、ここで「高知尾師ノ奨メニヨリ、法華文学ノ創作」を文字通り受けとってはならないと思う。先の関宛の書簡に「おお、妙法蓮華経のあるが如くに総てをあらしめよ」とか、「これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です」はこれらのことを合わせて考えたならば、決して文字通り受けとることができない。では彼の作品は確固として何らの思想の背景もなしに生まれてきたのであろうか。否、決してそうでないと思う。佐藤勝治は「一つ一つの作品に目的意識は持たなかったに違いありませんが、彼のものの感じ方、とらえ方、生活そのものが彼独自の宗教にあったのですから、その感じたものの、とらえたものを形象化した作品、——童話や詩は信仰文学ならざるなし、ということになるのです。階級意識というイデオロギーではものを書かなかったが、宗教（法華経）というイ

デオロギーでは、意識のあるなしにかかわらず書いてゐる」というのである。それくらい彼の信仰は肉体的なものであった。だからこそ、机上並びに周囲を信仰の場として潔め、身心一筋に仏の道にそむかざらんことを願ひ、「然ル後ニ全カ之ニ従フベシ」といつてゐる。そこではじめて「断ジテ教化ノ考タルベカラズ」が強く浮かび出てくる。そして「信仰ノ場」での「純真法楽」なのである。

註1 佐藤勝治著『宮沢賢治批判』

2 佐藤勝治著『宮沢賢治批判』

(3)

このように考えた時、賢治にとって芸術とは「法」の世界の認識とその表現にほかならなかつたのである。「これからの芸術は宗教です。これからの宗教は芸術です」といつてゐるように、新しい芸術的作品を生み出そうと決意し、こうした芸術がやがて大衆化されて法華経の真理を拡め、自らの名も広まるであろうことを夢みてゐるが、しかし彼のわがった独立の生活は長くつかず帰宅することになったが、それは敗北であつた。だが敗北に終つたといつても、中央文壇への憧憬は消えてはいない。この年の十二月には花巻農学校の教師になり、かたわら童話の創作は続けられてゐる。大正十二年五月に自作の劇『植物医師』『バナナン大将』を上演し、毎月詩短編を書き、また、地方新聞などに詩や童話を発表してゐるし、この年の一月には令弟清六をして童話の原稿を『婦人画報』編集部へ持参せしめて断られたことは先にも述べた通りである。このように

中央文壇へ、広くは社会全体に働きかけようとする志を捨ててゐないのである。更到大正十三年には、彼は「心象スケッチ」と名づける詩集『春と修羅』（四月）、及び童話集『注文の多い料理店』（十二月）を夫々自費出版してゐるが、これは自費出版してまでも自分の作品を読んでもらいたいという働きかけであり、自己の作品への自信である。勿論この裏面には「大乘教典の真意を拡め」る意志も含まれてゐたことはいふまでもない。こんなところから「それから今日別便で童話三十、スケッチ集三十お送りしましたからそいつを思い切つてすばやく売り飛ばしてあなたの詩集のたしにしてください」（森佐一宛書簡、大14・9・21）という自信に満ちた（作品が売れるということ）言葉も出るであらう。この意味において、純橋達雄の「詩集『春と修羅』の基調をなすものは孤独な魂の独白であり、これに対する童話は、他へのよびかけ乃至は働きかけである」（『四次元』百号）という意見が、この時期までは当てはまる。それはどのような立場から呼びかけようとするのか。それは童話集『注文の多い料理店』の「新刊案内」を読めばほぼ明らかである。この「新刊案内」と「序文」は彼の数多くはない文学論の中の一つであることから言つても、また、童話集を出版しようとする抱負に満ちた時期に書かれたという点から見ても、彼の童話観解明の重要な鍵である。しかもこの「新刊案内」の中には、彼が意識して書いたのか、無意識のうちに書いたのかははっきりしないが万物に神の慈光が及び、万物に仏性がそなわり、「罪や悲しみでさへそこでは聖くきれいに輝き」、「既成の疲れた宗教」を排すると言つてゐるように法華経が現われている。この「既成の疲れた宗教」というのは、

浄土宗とか禅宗とか、真言宗のことを指すのであり、法華經を最上の教典と評価する日蓮主義（日蓮宗にあらず）のことを、つかれない新しい宗教としているのだと言うことが出来る。^{註1} また、「新しいものによりよい世界を構成する材料」とは、「おのれをすてよ」「すべてのものに仏となる可能性はある」といった考え方の土台をきずいていくということになる。^{註2} この国分太郎の言葉をひかずとも彼の童話の処女作『蜘蛛となめくちと狸』の中にもある。この作品に見られる狸と兎の言行は墮落した念仏宗の僧俗、布教師や愚かな信者達の傾向、タイプといったものを表現しているし、文中しばしば繰返される「なまねこ」とは狡猾な「山猫」の音感と「ナムアミダブ」の口気を取り合わせた露骨な諷刺の新造語であるといわれる。^{註3}

この「新刊案内」と「序文」とから彼の童話観を解明すれば、「序文」には「わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすぎとほったほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。」と述べているのは、児童のために念願した制作であることが明らかであり、「新刊案内」の特色の第一に「純真な心意の所有者たちに欺き与へんとするものではない」という言葉や、「正しいものの種子を有し、その美しいものの発芽を待つ」という、教化性の配慮がなされており、これらはみな児童愛から出発して児童のために書いていることがわかる。これに対し『赤い鳥』の鈴木三重吉の童話創作の直接動機は彼自身が語っているように長女の誕生に遭つて、彼のもった父としてのいわばせまい児童愛である。それが年少者一般にまで敷衍したのが、

したいと思ひまして、月刊雑誌『赤い鳥』を主宰発行することに致しました^{註4}という宣言になったのである。児童の心性の開發を目ざしているのは、賢治の「新刊案内」における特色第一の言葉と合致するのである。

『赤い鳥』に代表される中央文壇の流れと「新刊案内」の比較の点については、既に恩田逸夫が『宮沢賢治の童話文学制作の基礎』に、詳しく考察され証明済みである。

彼の児童愛は実生活とどのように結びつくのか。それは第一に農学校の教師であつた。大正十二年に自作の『植物医師』『バナナ大将』をまた、大正十三年には自作の『饑餓陣営』『ボランの広場』『植物医師』『種山ヶ原』を花巻農学校の生徒を監督して劇を上演させている。それに子供会をつくったり、農学校の生徒と共にイギリス海岸を散歩していること等は、児童愛の現われであるとは言えないだろうか。農学校の生徒であれば、年齢的には児童の枠を越えているが、彼の「新刊案内」の中に「年少女期の終り頃からアドレセンス中葉に対する一つの文学の形成をとつてゐる」とあり、そのアドレセンス中葉に相当する年齢である。ここに賢治童話が、所謂「童話」でないといわれる理由がここにあるのではないだろうか。童話というものはあくまでも児童へのお話であつて、読者層は児童であるという目的のもとに創作されるものである。それが賢治の場合「文学としての形式をとつた」たのであつて、童話を書いたとは言っていない。この言葉だけについて考えてみれば、「形式」として「童話」を採用したのであつて、読者として予想されるのは児童であっても、成人であってもよいわけである。また、「そ

れはどんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人共通である」と述べているように、万人に理解しやすいように童話形態を採ったとも考えられよう。年少者というものに特に力を注いでいることはいうまでもない。「純真な心意の所有者たち」に与える文学であり、且つ「純真な心意の所有者たち」とは「卑怯な成人」以外の者、すなわち「児童」（年少者も含めて）を指すことになる。それよりも序文」の終りに「わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが云々」と述べていることによって児童のために念願した制作であることが明らかである。

註1 国分一太郎著『生活記録・児童文学』参照。

2 註1と同じ。

3 丹羽俊夫「賢治の詩と法華経」（『宮沢賢治と法華経』所収）。

4 「私の作篇等について」（『鈴木三重吉全集』第五卷所収）。

5 『跡見学園国語科紀要』第四号所収。

(4)

賢治は大正十五年三月に、花巻農学校を依願退職し、四月には花巻町下根子桜に自炊生活を始め、附近を開墾し畑を耕作した。^{註1}「かがやく宇宙の微塵」となるために、宇宙の底の東北の小さな町で、なによりもその隣人たちの幸福のために働いて、その臨終の日までかわらなかつた賢治は、ジャーナリズムに門をひらかなかつた自分の大衆のための作品、それを必要とする人々を、この身近かな隣人たちのなかに発見したのである。そのための作品が『農民芸術概

論』、『農民芸術概論綱要』、『農民芸術の興隆』等である。だから、この期の作品に自伝的な、言わば私小説的な童話が三作品ある。『ボラーノの広場』、『ゼロ弾きのゴーシュ』、『グスコブトリの伝記』などがそうした匂いをもっている。他にこの期の作品としては、『銀河鉄道の夜』、『風の又三郎』、『北守将軍と三人兄弟の医者』だけである。この期になると、先述した続橋達雄の「童話は、他へのよびかけ乃至は働きかけである」という言葉があらはまらなくなってくる。彼の書簡（昭和七年六月十九日母木光宛）の中に、「こんな世の中に心象スケッチなんといふものを、大衆めあてで、決して書いてゐる次第ではありません。全くさびしくてたまらず、美しいものがはしくてたまらず、ただ幾人かの完全な同感者から『あれはさうですね』というふうなことを、ぼつんと云はれる位がまづのぞみといふところです。」或いは、「この数年、意久地なく疾みまして、ただもう事からも、人からも遠ざかり遁げるやうにばかり居ました次第、悪しからずご諒察ねがひます。」（昭和七年九月二十日吉野信夫宛）という言葉が見られるように「他へのよびかけ乃至は働きかけ」が消えてくるし、次第に孤独にさえなってくるのである。彼が農民の中に入っていた理由は「俸給生活にあこがれる生徒等に、帰農をすすめるながら、彼はふと、——自分は学校に出て、それらの生徒のとかく嫌がる労働を少しもしてゐないではないか。と自分の現在の生活を反省したとき」に、^{註2}「辞意をかためるのであるが、私には彼が二十六歳頃から農業に従事することを希望していたのではないかと思われる。先にも引用したように大正十年に上京した時、八月に出した関徳弥宛の書簡の裏に「岩手県だ。（中略）俺は只一人で

其処に畑を開かうと思ふ云々」があるし、他に『堅い瓔珞』（詩）

のあることを忘れてはならない。『堅い瓔珞』には、天において果報尽きて落下する天人の姿を見、哀傷の悲鳴を聞き、無明の世界に流転しつづけるすべての哀しい運命を思い、苦海に迷惑する同朋を救うために、自ら雄々しく湖に堕ち次いで人々をともなつて再び天界にもどり、やがて真実の悟りの境涯に到ろうとする願いが述べられている。これは彼の二十七歳時の創作である。即ち彼のこの天人的境地から決意がみごとに開花して、羅須地人協会時代の東奔西走するまでに発展する。この時、すなわち大正十一年にすでに「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という普遍的愛の宣言は彼の胸中にあつたのではないだろうか。

註1 『農民芸術概論』序論。

2 東光敬著『宮沢賢治の生涯と作品』。

(5)

以上伝記を参照しつつ制作年譜を辿つて賢治の創作動機と成立過程をながめてきたが、一応、全体を要約して結びとしたい。

賢治が最初、童話を書いた動機は中央文壇の影響であり、中央文壇への憧憬と経済的自立を夢みて上京し、国柱会活動をしているときに大乘教典を誦めようと決意し、そこへ高知尾智耀から奨められてそれがより積極的になる。中央文壇への憧憬と大乘教典を誦めんとする一石二鳥の策を考えたが、自分の作品を世間の人々に受け容れてもらえず、そのため帰郷後も中央文壇への憧憬はまだ消えなかった。そのうち農学校の教師になり、児童愛から童話集を自費出版するが、このときはまだ自分の作品に対しては自信を持っていたが、この自信も要するに自己満足に終り、そこで自分の作品の理解者を隣人（即ち彼の考える）に見いだし、その人たちの幸福を願つて書き続ける。家族の人から離れた彼は次第に孤独になつていき、その孤独から救われようとしてひたすらに童話を書き、自慰的な作品となつてくる。それが自伝的な、いわば私小説的な童話の成立となつたわけである。自らの慰藉として書かれた賢治童話が、要するに児童のためのそれではなくて、所謂「文学」の領域に入るものであることは断るまでもないであろう。

—— 完 ——